

# 祝・盛田稔理事長100歳



激動の1世紀に万感の想い



平成 28 年 12 月 22 日美土里会職員主催の『祝う会』にて、奥様と法人若手職員と共に

## お祝い会を開催

当法人の盛田稔理事長が、三月十五日にめでたく百歳を迎えられました。それに先立ち、十二月二十二日に『祝う会』を開催。理事長の奥様にもご出席いただき、法人職員六十余名の参加を得て開催されました。

定刻となった十八時三十分、理事長ご夫妻が会場に到着すると職員一同が万雷の拍手でお迎え。職員代表から感謝状と記念品を贈呈した後、お祝いのケーキを前に職員一同でハッピーバースデーを歌い、祝意を表しました。

一九一七(大正六)年三月十五日生まれの理事長は七戸町川去の出身。挨拶のなかでこの百年間を振り返り、「人生の思い出で真っ先に浮かぶものは大東亜戦争です」と、戦時下での経験について語って下さいました。「中国本土を行軍した時のこと、余りに大きい揚子江は潮の満ち引きがあったため、引き潮の時に歩いて渡ったこともある」

「近頃、魚釣島(尖閣諸島)の防衛費を増額するというニュースが流れるなど領土問題が盛んに取り上げられています。魚釣島がどこにあるかを書いた貴重な本があり、それを書いたのは何と当時中国外交官を務めていた、七戸町出身の米内山庸夫さんです」など、昨今の国際情勢を踏まえながら、昭和・平成生まれの職員は想像も出来ないような人生経験を語り、参加者の興味を惹き付けていました。

## 町からも長寿のお祝い

三月十五日、誕生日を迎えられた盛田理事長は、同日自宅にて町長から長寿の表彰状とお祝い金を頂きました。

奥様と一緒に出席した理事長は、小又町長から直接お祝いを手渡されると「長生きし過ぎました」と語って周囲を和ませていました。また町長から「盛田さんは郷土史や特に樹木を中心とした自然研究の第一人者。これからも健康に気を付け頑張ってください、第一線で活躍し続けて頂きたいと思っております」とお祝いの言葉を伝えられると、「まだまだやりたい事はたくさんあります」と語り菩提樹など樹木の話、七戸や青森県内、さらには中国の歴史の話、台湾にいる自慢

特別寄稿 『はんの木だより』の由来

美土里会広報誌『はんの木だより』は、理事長が強い想いを込めて名付けたものです。今回特別に、名前の由来について、理事長に寄稿して頂きました。

美土里会という名前は、緑豊かな美しい自然、そして私の母の名前『みどり』にちなんだものです。美土里荘の敷地周囲は常緑・広葉樹合わせて約七十種類の樹木に囲まれています。豊かな樹々からは、フィトンチッドと呼ばれる気持ちを落ち着かせ免疫力を高める化学物質が発散されており、ご高齢の方にとってこれ以上なく良い環境なのです。

戦後の農地改革後、私はこの地をダイナマイトを使って開墾しました。戦後の荒地に何とか緑を回復させたい。そう思った私は、この地にコバハンという樹を植えました。コバハンにはハンノキの一種で、優良樹種が育たないような荒地を好む樹です。この樹は空中から窒素を吸収し、それを根に蓄えて土を肥やします。そのため、普通なら荒地では育たない樹でも、コバハンに隣に植えることにより立派に成長することが出来るのです。ところが、一緒に植えた樹が自立出来るようになると、コバハンはその役目を終えて伐採されてしまいます。つまり、コバハンはその命を使って土を豊かにし、他の樹を育てるのです。

この性質に注目した私の父・達三は、コバハンに『子守木(こもりぎ)』という名前をつけました。その後私は、『身を殺して以て仁を成す』という孔子の教えから、コバハンを『成仁木(せいじんぼく)』と命名し、韓国その他外国へその種子を送るなど、普及に努めました。コバハンの持つ性質は、まさに本会理念の『忠恕』に通じるものがあります。職員一同、忠恕の心を決して忘れることなく介護という聖職を全うして欲しい、そのような思いから広報誌を『はんの木だより』と命名しました。職員の皆さんの、これからの活躍に期待します。



(上)町長から表彰状を受け取る  
(下)ご家族と記念の一枚

の教え子の話などを語り始め、町長を驚かせるなど、今後の活動に意欲的な様子を見せていました。

# 盛田理事長・激動の百年間

## 類稀なるその人生



大正9年、生家である工藤家の写真。前列右から3番目が理事長

盛田理事長は大正六年二月十五日、現在の七戸町川去で九人兄弟の四男として生まれました。

理事長のお父様である工藤祐司氏は教師であったため、幼少期の理事長は県内各地を移り住みました。大正十一年に青森女子付属小学校の一年生となった理事長は、成績があまり良くなく、五十人中いつもビリから二番目くらいだったそうです。中でも算数が最も苦手だったとか。今の理事長からはとても信じられません。

その後、八戸尋常小学校へ入学。県立八戸中学校へ入学予定でしたが、お父様の転勤により県立弘前中学校へ入学しました。一年時の成績も二百人中百番台と平凡なものでしたが、お父様の「先生はな、勉強したくない生徒には本気になつて教える気持ちにはなれないものなんだ」という言葉に衝撃を受け、勉強を開始。四年生の頃には十二番まで一気に成績を上げるなど、努力を重ね七倍の倍率を突破し官立弘前高等学校へ入学。より高度な教育を受けながら勉学に励み続け、三年生の時には一・二番の成績となりました。

昭和十三年、理事長は悩みに悩んだ末に東京帝国大学（現在の東京大学）経済学部を受験。見事合格を果たし、大学生となります。大学時代は勉学に励む一方、東洋思想を通じ国際社会で広く活躍する人材を育成するための禅塾「東光書院」の塾生となり、寮で規律正しい生活を送りました。昭和十五年には現在の奥様と出会い、盛田家の婿養子に。理事長いわく「超美人は嫌いだがほどの美人であったので安心して」結婚。その年の十月に結婚式を挙げ、一週間も経たないうちに東京の下宿に戻り学生生活を続けました。



大学生時代の理事長

昭和十六年陸軍経理学校丙種学生募集に出願。何と八十名募集に一千名以上の応募がありましたが見事五番という高順位で合格、陸軍経理部見習士官要員として入隊。二か月の兵営生活を経て陸軍主計中尉に任官され、陸軍経理学校に入校。六ヶ月で平時・戦時における軍隊の衣・食・住・会計経理に関する学問事務、実施方法をすべて身につけなければいけない超過密スケジュール。ようやく奥様を東京に呼び、軍務に専念したそうです。陸軍経理学校卒業後は弘前の近衛歩兵第五十二連隊補充隊に配属。給養と酒保（しゅほ：軍人に日用品や嗜好品を販売する売店）の任に就き、軍人としての道を歩み始めました。

そこからはまさに、戦時中という時代に翻弄された、激動の日々を送ることになります。下士官採用試験の監督や訓練施設の設営に携わる日々。戦時編成が下され、八戸に移駐。戦時の準備のため四方を駆け回ります。陸軍主計大尉に昇進したある日、突如支那（中国）派遣軍として支那大陸に進出せよ、と命が下ります。八戸駅から出発し下関から連絡船で釜山（韓国）を経て、天津、漢口、武昌などを転戦。後方支援や兵舎の設営などに従事しました。間近で爆撃を受けたり将兵の死も目にするなど、想像も出来ないような壮絶な日々を送った後、敗戦。永豊という町で涙を流して玉音放送を聴



陸軍主計中尉の軍服を着て

き、その後は揚子江の中流の嘉魚という町にある俘虜（ふりよ、捕虜のこと）収容所での暮らしを余儀なくされました。しかし俘虜収容所といっても想像していたイメージとは全く異なり、開放感に満ちた空間でした。米は現物支給、諸経費として一人百円支給、自分たちで自炊をしたり、相撲や体操など自由に身体を動かすことも出来るほど。炊事用の薪の確保に苦心していた時、揚子江に潮の満ち引きがあることに気づき、引き潮の時に中州まで行き柳の木を切って持ち帰るなど、機転を利かせながら何とか物資を確保して行きます。現地市民とも友好関係を築いていた折、復員の命が下り、嘉魚から南京へ移動。上海、宝山を経て船で帰国。一年七ヶ月の時を経て、とうとう帰国、七戸へ戻って来ました。この時蒋介石軍の温情・支援で無事帰国出来た事から蒋介石・台湾への感謝の念を持つこととなった理事長。その後、蒋介石第五任総統就任式典に参列した事を皮切りに台湾との交流はどんどん深まって行き、実に二十回以上も台湾を訪れています。



現在の美土里荘周辺を開墾

七戸に戻ってからの第二の人生もまた、過酷なものでした。公職追放中でもあり田畑を耕す日々。それ以外に道もなく、理事長は方々を駆け回りながら独学で農業知識の習得と実践に精を出し続けました。新たなことにも取り組み、当時大変珍しかったルバーブの栽培なども行いました。公職復帰後は農業関連の仕事や開墾を続けながら七戸中学校、七戸高校の教諭となり、弘前大学、青森短期大学の教授を歴任。さらには昭和四十一年に十和田市に新たに出来た北里大学獣医学部の教授となり、第一期生として入学した、息子である故・盛田益三前園長とともに車で通う毎日でした。



バッターが理事長・キャッチャーが益三前園長

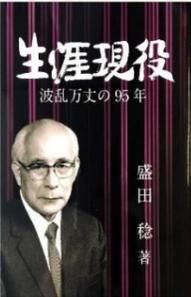
つた謝明良氏はその後台湾国立大学の教授となり、東洋陶磁器研究の世界的権威となつています。理事長は「これからは地方の時代だ」と、地域文化の興隆と地域福祉の充実のために、青森大学に社会学部を創設。今もなお、同大学の卒業生が県内外の社会福祉分野で広く活躍しているのはご存知の通りです（美土里会にも卒業生が！）。青森大学学長職は、七期二十一年と長期に渡りました。

昭和六十年代に入り、大きな転機が訪れます。文化庁による七戸史跡の買い上げが始まり、理事長が所有する柏葉城跡北郭の土地がその対象となりました。まとまった金銭が入り「生まれ育った七戸町に何か恩返しをした」と考えた理事長は当時の浜中博町長に相談し特別養護老人ホームの建設を決意。社会福祉法人名は、緑豊かな美しい土地、そしてお母様の名「みどり」から、迷うことなく美土里会と名付けました。また、世界三大聖人の一人である儒教の祖・孔子の教え「真心から人を思いやる事」を意味する「忠恕」を美土里会の理念と定め、普及を図りました。

昭和六十三年、特別養護老人ホーム美土里荘開設後は、高齢者福祉はもちろん、青森大学学長として次世代を担う若者の育成、自然・樹木・国内外の文化・歴史の研究、青森県史編纂はじめ多数の執筆活動、自ら畑に出てルバーブやカシスなど先進的な作物を育て加工するなど、何足のわらじを履いているか判らないほど精力的に活動を続けました。研究の中には、学術的にも大変貴重なものや新学説となったものも少なくありません。自然科学、特に樹木の研究では、東京大学で行われたイチヨウに関するフォーラムに聴衆として参加、パネリストが答えられない質問に代わりに回答するなど博識を披露し、他の聴衆が殺到したこともあるほど。更には地方史・文化研究などで高い評価を得て行き、特に七戸町などの「戸」の研究で注目を浴びたほか、南部小絵馬の研究では絵馬に描かれている馬がその特徴からアラブ種であることを発見しました。

広範囲に渡る社会活動も、理事長のライフワークの一つ。人権擁護委員を四十二年も勤め、青森県文化財専門委員長、ATV番組審議会委員、青森県観光審議会会長等、枚挙に暇はありません。九十五歳の時には青森山田学園理事長にも就任、現在は青森山田学園名誉顧問、東北巨木調査研究会顧問等の要職に就いています。百歳となった今でも「まだまだやりたい事がたくさんある」と力強く語っており、まさに『現役』で活躍されています。

### お知らせ



今回掲載した『激動の百年間』は、理事長の著書『生涯現役 波瀾万丈の九五年』（文化出版社）から紹介したものです。ぜひお手に取って一読下さい。

### 編集後記

はんの木だより発行以来、初めて号外という形で発行しましたが、いかがでしたでしょうか。美土里会理事長にスポットを当てた今号、改めて人生経験の豊富さ、人間の大きさに驚く事ばかりでした。理事長、百歳おめでとうございます！